

【書評】

高瀬幸子 著『在宅高齢者へのソーシャルワーク実践

—混合研究法による地域包括支援センターの実践の分析—

(明石書店, 2013年, A5判, 292頁, 4,968円)

藤 林 慶 子
(東洋大学)

はじめに

地域包括ケア研究会は、地域包括ケアの構築における論点を2008(平成20)年度に地域包括ケアの構築における論点を明らかにし、2009(平成21)年度には、2005年度に実現すべき地域包括ケアのあり方と当面の改革の方向を提言した。そして、2012(平成24)年度には、2025年に向けて、地域包括ケアの強化すべき点や重点的に検討すべき論点を整理した。2012年度の報告では、「生活支援や地域資源の開発、医療・介護の連携、地域の諸主体が取り組むべき方向性などに焦点を当てて議論」している。そして、2012年度の報告書の中で、地域包括支援センターは、生活支援においては医療と介護の連携等のコーディネートの役割を果たすことが期待されており、地域包括支援センターの取り組みが適切に連携・協働することによって医療と介護の相互理解を深めていくことが求められ、その果たすべき役割がますます大きくなっていくとされている。

そのような意味からも、本書はサブタイトルに「地域包括支援センターの実態分析」とあるように、今後の地域包括ケアシステムにおけるソーシャルワークの構築に重要な示唆を与えてくれるものと期待できる。

本書は博士論文をもとにしたものであり(p.287)、序章を含めて7章から構成されている。そして、序章において、本研究の目的として、「地域包括支援センターの高齢者ソーシャルワークに

おける個別援助において、高齢者が持つ問題とそれに対応するソーシャルワークの機能を、ソーシャルワーク理論に基づいて実証的に明らかにすること(p.8)」とあるように、地域包括支援センターにおける「基本的なソーシャルワーカーの役割である高齢者への個別援助に焦点を絞って(p.8)」執筆されている。

高齢者ソーシャルワークとエコロジカル視点

第1章では、高齢者を対象としたソーシャルワークに関する先行研究のレビューを行い、先行研究から高齢者分野に取り入れられてきたのがエコロジカルな視点であることを示し、この視点に基づいて研究を進めることを述べている。第2章では、エコロジカルな視点についての先行研究の文献レビュー、エコロジカルな視点に重要なストレスとコーピングの概念についてのレビューを行い、エコロジカルな視点の核となるストレスとコーピングの概念を整理している。

米国における高齢者ソーシャルワークの文献レビューでは、1950年代以降を対象とし、1950～60年代、1970～80年代、1990年代以降の3つの時期に区分し、大変丁寧に文献を分析している。特に「(3) サービスの効率化と費用抑制」では、米国におけるケアマネジメントの発展が整理されており、我が国の介護保険制度におけるケアマネジメントとの対比で読むと大変わかりやすく、我が国のケアマネジメントの問題点等が明らかにな

る。

そして我が国における高齢者ソーシャルワークの文献レビューから、「わが国では、研究の発展以上に高齢化に伴う現実的課題の進展が早く、理論的根拠が明確にされないまま制度的枠組みに影響されてきた経緯がある (p.40)」と述べているが、先行研究を細かに調べているからこそその説得力のある文章であると思う。そして、「ソーシャルワーカーは、むしろ介護保険サービスでは対応しきれない幅広い問題にこそ目を向けるべきである (p.40)」という意見は、あとがきにあるように医療ソーシャルワーカーとしての実践があったからこそ、筆者の言葉の重みとして伝わるし、実際にそうあらなければならないと共感できる。

第2章では、エコロジカル視点についての先行研究レビュー、人と環境を捉える概念として規定されているストレスとコーピングに関する先行研究レビューを行うことにより、ソーシャルワークの研究における両者の捉えられ方を整理している。

しかし、確かにエコロジカル視点等は重要であり、第1章においても、「1970年代と1980年代には、ソーシャルワーク全体においてエコロジカル視点の導入と確立が進んだ」とまとめられ、高齢者分野に、生活機能年齢モデルと補助的機能モデルが今日まで影響を与えていることを述べてはいるが、もう少し詳細に第1章から第2章へのつながりを述べてほしかった。本として読んでいった場合に、どうしても「第2章 エコロジカル視点」というのは大きなタイトルであり、章立てにした場合、意味が重複するとしても章の最初に説明をされていないと、唐突に見えてしまうからである。

第2章の「第2節 ストレスとコーピング 4. まとめ」において、「そこで、本研究では、コーピングは尺度を用いた量的な把握と、インタビュー等による質的な把握の両方を行う (p.73)」とあるが、エコロジカル視点という先行研究レビューから、なぜ高齢者を対象とした研究の方法についてつながるのかの説明が不明確であると思う。

第3章の「研究デザインー混合研究法」は、博

士論文においては重要な章であり、大変興味深く読めるところではある。しかし、混合研究法自体の説明が、「在宅高齢者へのソーシャルワーク実践」というタイトルの一冊の本章のタイトルとしては説明が不十分であると思ってしまうことも否めない。読者は「在宅高齢者へのソーシャルワーク実践」を学びたいということで本書を手にしたはずである。特に、量的研究と質的研究についての研究方法を先行研究等からまとめ、説明した同じ節で、博士論文における研究が何に基づいて行われているかを説明している点は、節のタイトルが「質的研究」「量的研究」であるだけに、違和感がある。あくまでも質的研究という節では、質的研究について述べた上で最後に研究との関係をもってくる方が、次章とのつながりが読者にとっては読みやすいのではないだろうか。

あとがきに「博士論文がもとになっている (p.287)」とあるが、あくまでも「もとになっている」のであれば、読者のためにもう少し説明を加えてほしかった。

しかし本章は、これから修士論文や博士論文を執筆する大学院生にとっては、必読すべき内容である。混合研究法の先行研究のレビューを行い、マルチメソッド、トライアンギュレーションの違いを述べているが、大変よくまとまっていると思う。

トライアンギュレーションは一時期、我が国の医学分野でよく使用された用語であり、本書にも書かれているように「積極的に用いられるようになった (p.79)」が、だんだん使われなくなった経緯がよく理解できた。しかし、先行研究数が前の章と比して少なく、特に研究に直接関係がないためか、我が国のトライアンギュレーション等の先行研究についてはあまり触れられていない。

章として独立させるならば、もう少し我が国におけるマルチメソッドとトライアンギュレーションの捉え方についても述べた方がよいのではないかと思えた。

高齢者のコーピングに関する量的研究と、地域包括支援センターにおける援助事例の質的研究

第4章と第5章は、大変興味深い研究である。

第4章の量的研究では、「多様なソーシャルワーク実践の中で、高齢者本人に対する援助に焦点を当てるために、一人暮らし高齢者に絞って研究(pp.93-94)」を行い、2,907人を対象として調査を実施し、1,391人からの有効回答を得ている。これだけの大量データの調査は、社会福祉分野では少ないだけに貴重である。

コーピング特性簡易尺度を①問題焦点型コーピング、②情動焦点型コーピング、③回避型コーピングとし、その18項目について、4件法で回答を求めた結果である。分析は、①因子分析、②クラスター分析、③判別分析を行っている。それぞれについて、大変丁寧に分析を行っており、この分析方法等も院生にとっては参考となる。

第4章第4節の考察では、この量的調査の結果、「一人暮らし高齢者のコーピングについての全体的な傾向を把握してきたが、ソーシャルワーカーはそれだけではなくクライアントの状況の個別性も理解しなければならない(p.105)」とし、次章の量的調査につなげている。

第5章では、地域包括支援センターにおける援助事例に関する質的研究について、詳細に述べている。本書のタイトルである「高齢者へのソーシャルワーク実践」を述べるポイントであり、頁数も一番多く、筆者が最も力を入れた章であるということがわかる。

本章では、ソーシャルワーク実践の現場における高齢者のストレスとコーピングの相互作用、それに対するソーシャルワーカーの実践の専門的機能を明らかにするために、事例分析を行っている。東京都と神奈川県の5カ所の地域包括支援センターの社会福祉士であり、「社会福祉にアイデンティティを持ってソーシャルワークを実践している(p.110)」7名が担当する22事例を対象として分析している。

第5章第3節事例分析の理論的枠組みでは、前

章までに行った結果から、ライフ・ストレッサーとコーピングを整理し、ソーシャルワーク機能については、「エコロジカル視点に基づくライフ・モデルを始めとする3つのソーシャルワークの先行研究、および日本社会福祉士の提示するソーシャルワークの共通基盤、さらには分析対象の包括センターの前身である在介センターに関する先行研究(p.120)」に基づき構成されている。ここではソーシャルワークの機能として、在宅介護支援センターの先行研究を基に個別援助における機能と、包括センターで求められている「見守り」の機能を追加して、本書におけるソーシャルワークを①精神的支援、②代弁・権利擁護、③現物提供・直接介助、④情報提供・助言、⑤サービス利用調整、⑥見守り、⑦関係調整(対本人)・関係調整(対環境)としている。

調査対象が、「2006年に包括センターに改編される以前から、在介センターとして地域の高齢者への支援を継続して行っており、実践の積み重ねがある機関(pp.109-110)」であるとしても、サブタイトルに地域包括支援センターという用語を使用しているのであれば、在宅介護支援センターのソーシャルワーク機能だけではなく、地域包括支援センターのソーシャルワーク機能も論じたうえで機能に追加するか、入れないのであれば、その理由を明らかにしてほしい。

そして、p.124の表5-6「ソーシャルワーク機能の分析枠組み」やその説明に地域包括支援センターのソーシャルワーク機能との関係が明記されていないのが残念である。地域包括支援センターで社会福祉士が行う業務をソーシャルワーク機能として、高齢者ソーシャルワークとするのであれば、その説明を入れた方がよかつたのではないだろうか。

総括と今後の課題

第6章は総括である。理論的考察を、①ライフ・ストレッサー、②コーピング、③ライフ・ストレッサーとコーピングの相互作用、④ソーシャルワーク機能の4点からまとめ、実践的考察、方法論的考察と研究の限界と今後の課題を述べてい

る。研究の限界と課題として、①エコロジカル視点に理論的な精緻化が求められること、②量的研究、質的研究のいずれにおいてもサンプルによる限界があること、③経時的な変化が把握できていないこと、④研究の焦点が高齢者の援助に限定されていたこと、をあげている。

最初にも述べたが、筆者は地域包括支援センターの「ソーシャルワーカーが高齢者の問題にどのような問題に対して、どのようなソーシャルワークを行っているかを現場から捉えて、その存在意義を明確に示す必要がある (p.8)」としているが、本書はあくまでも在宅高齢者へのソーシャルワーク実践についての論文であるということを最後に強調したい。

本書は、高齢者へのソーシャルワーク実践をエ

コロジカルな視点から捉え、さまざまな分析を行った力作であると思う。サブタイトルや序章の記述から、地域包括支援センターのソーシャルワーク機能についての内容かと思ってしまうが、あくまでもエコロジカル視点からの在宅高齢者へのソーシャルワーク実践の分析が、筆者が明らかにしたかった点である。そして、その目的は十分に達成できた著書であると思う。

今後の課題において、「地域への支援も視野に入れて、より幅広い高齢者ソーシャルワークを捉える研究 (p.261)」の必要性や「個別の事例の積み重ねから、制度上の課題が明らかになることもある (p.261)」としているので、質的研究データを再度分析し、地域包括支援センターの存在意義を次の論文では明らかにすることを期待したい。